The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<書評>漆原美代子著　「都市環境の美学」　日本放送出版協会（NHKブックス）1978年（初版）
Author(s)	向井, 正也
Citation	デザイン理論. 1979, 18, p. 118-122
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53723
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

漆原美代子著
「都市環境の美学」

日本放送出版協会（NHKブックス）1978年(初版)

美しい名が体をあらわすように，著者は美しい女性のインテリア・デザイナーである。しかも女性には珍らしく(文句の出そうな発言だが御かんべんを)口八丁手八丁の人であるらしい。意匠造形的活動の片手間に数々の専門の著書や訳書(註)をものするという，かくいう私など，ツメの垢でも煎じてもらいたい程の，知情両面に亘る大活躍をされて来ている。

つい先日の朝日新聞の〈近況〉欄によれば，本年6月にはアスペンのデザイン会議に出席，秋には南仏を巡る計画だとか，なかなか優雅な日程のようだが，それは決してアソビ事なんかではなく，ことごとくこうしたデザイン論の血となり肉となるもののようである。本書でもそうした彼女の生活体験が立論の重要な基礎になっていることがよくわかる。

本書に先立って彼女は，「身のまわりのデザイン」―環境の美学―（三一書房，1968〈初版〉）という小冊子をものしているが，この書のタイトルにも示されているように，ここでも彼女は，やはり室内デザインを実践したり，海外を旅行したりする中で，美について論じたり考えたりしたことを基礎として，環境の美の本質にせまる方法を思惟しているようである。

こうした実体験からするアプローチが，「インテリア」を狭義の室内からより広義の「アーバン・インテリア」へとエスカレートする，発展のプロセスを辿って来て来たのは，これまた珍らしい例として注目に値する。

この書の「あとがき」の中で彼女は，何故インテリア・デザイナーという，ものをつくる仕事を本業としながらも，ものをかく世界に入り込まなければならなかったかという，みずからに課した設問にこう答えている。

「〈そこで人が生活する〉という環境デザインにともなう行為と思考の過程は，どのみちつねに今日の文明の質そのものとの不断の〈対話〉であり……その根底にある日本そのものとの具体的，あるいは抽象的な体質，また日本人の感性や習慣との出逢いを避けることはできない」そしてこれにひきつづいて次のようにズバリ思い切った発言をして私をおどろかせたのである。

「じっさい，かたちをつくる者は，好むと好まざるとにかかわらず，同時に文明時評家であらねばならぬ」しかもなおその上，「こんな事は別段珍らしくもない通説で，ふつうにめざめているデザイナーなら当然受けねばならない業にあろう」(傍点著者,原文のまま)

こうして彼女は近年になって，わが国の雑駁で醜悪な都市環境に，年を追うてますます業を煮やすようになり，ついにデザイナーの本業をなげ出したかのかたちで，彼女のいわゆる「文明時評」に本腰を入れてとり組み，生み出したのが本書なのである。

まったく珍らしいタイプの烈女の出現というべきか。いまや人間生活環境にとって危急存亡の歴史的に重大な時期に当り，デザイン一般に再考復初の気運が感じられる今日に至っても，なお高度成長の夢をすてきれずに，もっぱら美の追求に太平楽をきめこんでいる人間失格のデザイナーが多い世の中で，とにもかくにもデザインにモラルをもちこんだということだけでも，著者が果す警世的な役割は高く評価されてよかろう。

漆原美代子は1935年，香川県の生れ，1955年米国留学，ミシシッピー州立大学生活芸術学科，1956年プラット・インスティチュート美術学部インテリアデザイン専攻の後，1958年ジョージ・ネルソンの事務所での実習を経て欧州各国のデザイン界を視察，1959年多摩美術大学講師となり今日に至っている。

本書を読んでいると，こうしたの経歴からうかがえる，多感な人間形成の時代を，著者がアメリアで，ものづくりの仕事の研さんの過程にあったことが，よきにつけ悪しきにつけ，さまざまの形でその思考のあり方に大きく影響していることに今更のように気付かせられる。

そのよい面とは，何よりも著者が，教育と日常生活の両面で，不断にきたえられ，育てあげられて身についた，アメリカ民主主義の理念がその後の著者の不易の信発として生きつづけ，その文明批評の原点として何らかの倫理感を形成しているということである。

第1章「公共精神と美の復権」，第2章「公共空間の思想」は，ともにこうしたモラルをふくむ「義務や協調と同義の公共精神」にささえられた環境デザインにおける「審美的秩序」の問題がさまざまの角度から論ぜられていることは，こうした面では世界でも有数な前近代的後進性を示すわが国の，今後の生活環境の形成や景観問題などを考える上で有意義だと思われる。

たとえば建物のデザイン一つにしても，わが国ではこれまで，「その建物一つだけの芸術性を考えるのでなく，地域全体の一要素として〈景観の美〉を考え，いたわりながら計画するといった問題意識が欠落していた。田園，山林などの開発にも，コミュニティー形成の核である〈公共精神〉や〈美的観点〉から，制約またはしかるべき調整を加える，といった知覚が極めてとぼしかった」（傍点筆者）とのべているのはきわめて適切な指摘だ

と思う。

しかもそうした問題意識の欠如による環境破壊の責任を，根源的に市民よりは国や自治体，或はその他公共機関や企業体の指導層においていることなども見逃せない。

コマーシャリズムの跳梁をおさえるという一点からでも，このような公共性はデザインの内側ではぐくみ育てて行く必要が大いに痛感される。「16世紀アメリカの植民地時代，自然の原野に建設された諸都市は，〈市民全体の安全，便利，楽しさ，美しさ〉といった公共の観念によって創られて，(中略) それが現代の都市生活に好ましい審美的秩序を与えているが，その理由は，かつて植民時代の為政者が，街の審美的規制を重視しきめこまかな指示を与え，条項にとり入れていた」ことによると著者は考えるのである。

第2章でも上と同様の「私欲をこえた公共精神」の所産としての都市の公共空間の問題をとりあげ，70年代のアメリカで，そうした試みによって荒廃した都市をよみがえらせた運動の例をひきあいにして，わが国の今後のアーバン・デザインのあり方に示唆を与えるとともに，そうした点で現代の日本よりは一歩先んじていた「芸術的で都会人らしい」江戸の庶民が，生活に欠くべからざる袋置としての「公共空間」をもっていたことを「両国の川開き」に託して指摘し，そうした見直し，考え直しの回顧的な姿勢の中で，著者が書店で偶然見つけたという「明治大正図誌—東京(1)」（筑摩書房刊）における「江戸の香を残す明治大正時代の東京風景」を，やはりそこに，公共空間が市民にうるおいを与える場として生きていたとのべ，これを「本来の意味における近代的な街の風景」だとし，その一例として「東京日本橋之真景」の写真をかかげて，「川と岸の接し方，路のとり方，建造物の意匠，その各々に対する愛情，素材美の活かし方に対する美的節度が全体に循環していたとして，その景観を，「ヨーロッパの美しい運河の街ベルギー，ブールジュを連想させる」とのべているが，このあたりになると，以上の正論とは別に，実体としての環境美の把握について，彼女の目にいささか疑問をいだかざるを得ない。

わが国の現代の都市景観の劣悪さを指摘することに急なあまり，過去を美化しすぎ真実をまげた誇張であることは，少し目のある人なら，この図を一目見ればすぐわかるし，上記の景観の説明も一向に要領を得ないものでしかない。これがブールジュを連想させるなど，著者は下手をすると，その眼識についてカナエの軽重を問われることにもなりかねない。

こうした点は，もとよりインテリア・デザイナーとしての彼女のレパートリーを超えたもので，そこにはやはり一つの限界があるようだ。つまり彼女の環境の美学は，抽象的に，造形における公共精神や近代思想を論ずる場合は，かなり生彩を放つものの，具体的な都市の景観構成や空間造形の問題になると，このように何となくあやふやで説得力にとぼしいものに堕する場合が多いようである。

これはやはり，彼女がこうした面ではやはりアマチュアであることを物語るものだろう。たとえば，彼女はたまたま見た建設中の三条大橋歩道橋をまず何よりも環境意匠的見地から醜態として告発するのでなく，むしろその時あやまって美しい塗装だと見た，さびどめの朱赤の色が後に「どこにでもある薄い灰色」に変っていた点をのみ悲喜劇として注目したりするのである。

この辺に，一般に空間構成を，位相やスケールなどの問題としてよりは，ともすれば形態や色彩やテクスチュアの問題だけに短絡させてしまう，在来のいみでの造形家としての，いかにもインテリア・デザイナーらしい見方が示されていると思われる。

一方造形感覚や趣好の上で，著者は少くとも今日の建築的状況とはかなり大きな喰いちがいを示すのだが，それが一方でこの「文明時評」の一つの特性となっている点なども大きな問題だと思う。

もとより現時点で，建築とインテリア・デザインの世界との間には既にかなりの思想的なズレが生じていることを認めても，なお著者が本書の中で随時に示す，ある傾きをもった造形的な趣好の特異性は，全般的に見て，著者が建築思想的には未だにモダニズムの初期的段階にあることを示すものと考えられる。

それは本書のなかでしばしば連発される「審美的秩序」だの「節度の美学」，或いは「簡素の美」「統一性」など，一連の初期のモダニズムの美意識を支える造形理念にかかわりのあるコトバによって端的に示されよう。

それはまた一方では著者の「バロック嫌い」だとか，「擬似モダーン」などというものの考え方において，今日の前衛的建築に一般の，重要な基本的傾向としての「包摂的」(Inclusive) に対する，初期的傾向としての「排除的」(Exclusive) な，いわばピューリズム的姿勢を示すものであり，それは何よりも彼女の「単色好み」(したがって「多色嫌い」) に明らかに見られよう。

例えば第5章「地方性の洗練」のなかで彼女は，倉敷や津和野の「白と墨色の美しい町並み」を礼讃し，これと同じ線を示す，1970年西独ボン訪問の際に見た，「墨色の屋根と白いカベ」の家並に見られる「統一性」を好ましいものと考えたりするのである。

むろんこうした傾向そのものは，一がいに否定出来ぬ，ある意味では前向きのものだが，著者の場合は，どうもそこにアメリカでの教育と生活による，何らかの思想的孤立が示されるようで，これは彼女の在来期間である50年代後半から60年にかけてのアメリカ・モダニズムの思想的状況が，かつてのバウハウス時代と併行的な，いわゆる「機能主義的」な古典的段階におかれていたことと無縁ではないものと考えられよう。

当時彼女は来米した丹下健三などのお伴をして，ミースの亜流たるＳＯＭのゴードン・

バンシャフト邸にまねかれた時の「デザイン的な感激」を語ったりなどしているが，こうした事実と当時彼女がうけたであろう，アメリカ的なデザインの職人教育などを考え合わせると，著者が本書をとおして示すガンコともいえる程のミース流の正統モダニズムの姿勢が理解出来るように思う。

なおこのほか著者は，上述のような初期モダニズムの感覚や趣好と不可分なものとして，彼女が下宿していたアメリカ中流家庭のハイカルチュアの好みが示す「西欧的教養人」の高いレベルから，わが国の民衆の生活文化を見下ろしたカタチの取あつかいを，彼らに対して「善男善女」などといういい方でハシなくも示す，いうなれば「高僧的な」説教調など，問題はまだまだあるのだが，この辺で止めておくことにする。

以上本書のマイナスの面をかなり取りあげたが，そうしたことは，最初にのべた本書のもつ，今日の類書には見られぬ啓蒙的な価値をそれほど減ずるものとは思われない。

40才以前の若さで，他領域の問題をこれほど深く追究して来たのは稀有のことだと思うが，著者は今後もひきつづき「都市問題に審美的側面から照明をあてる」社会的に意味のある仕事に打込みたいむね上記の〈近況〉欄で語っているが，近く本来の領域「室内建築概論」を書きおろす予定とのこと。才女の前途を大いに期待したいものである。

(註) 著書には，「インテリア・デザイン」—造形の基礎—（彰国社，1963）
訳書には，フリードマン他「インテリア・アーキテクチュア）「A・Friedman，J・F・Pile，F・Wilson：“Interior Desige”—An Introduction to Architectural Interiors)がある，尚訳書については本誌15号に山崎慶昭氏の書評があるので参照されたい。

（向　井　正　也）